

野國總管と甘藷 ～その功績と人物像～

伊波 勝雄*

1. ベールに包まれた 野國總管

わが国に甘藷を伝えたのは、1605年、沖縄の野國總管だと文献等で明記されています。語り伝えでは、野國總管は、北谷間切野国村（現在の嘉手納町字野国）の出身で、中国から甘藷を持ち帰り、その普及を図り、多くの人々を餓死から救った人物です。沖縄では、その功績によって近世期から尊敬の意味を込めて「いも大主（ウシュ）」と称されました。「主」とは、日本語では首長・君主を意味し、沖縄では父親・家の主を指し、故に「甘藷の父」として讃えられてきました。

ところが、わかっていることは、「野國總管」という呼び名から、その人物が北谷間切野国村の出身で「野国」に関係のある人だということと、「總管」が中国貿易の進貢船の事務を統率する事務長職の名称であることから、その役職を担った人だということだけです。野國總管の人物像や生涯、影響力などについて詳しいことはほとんどわかりません。具体的には、野國總管はいつどういう家柄の出身で、どのような暮らし方をしたのか。また、なぜ中国にわたって甘藷を入手したかについても知られていません。

2005年は、野國總管が中国より甘藷を持ち帰ってからちょうど400年の節目を迎えた年でありました。嘉手納町では、甘藷を

伝えた野國總管の偉大な功績を讃えて、さらには後世まで語り続けていくために「野國總管甘藷伝来四百年祭」を開催しました。その記念事業の一環として「記念誌編纂部会」では、野國總管の功績や人物像などについて探りました。本稿ではその一端を紹介します。

2. 史料にみる野國總管の功績

野國總管の功績を記した史料は、儀間眞常の記録として1690年～1700年代に編纂された「麻姓家譜」であり、その中には、次のような記述があります。「万曆三十三年（1605）、總管野國が中国から蕃薯を鉢植えにして持ち帰った。眞常はこれを聞いて蕃薯を求め、またその栽培法について教えを乞うた。野國がいうには、葛を以て輪となし、地に植えて栽培する。時期がきたら葛を引き上げて薯を掘って用いる。眞常は教えられた通りに七、八年、芋を試作した。



イメージで建立した野國總管銅像

大飢饉がやってきた時、眞常は蕃薯を国中に推し広めればきっと五穀の補助となる、どんな国宝もこれには及ばないだろうと考えた。それから試作すること数年、ついに葛の条（つる）一尺余を切って、それを広く原野に植えさせた。十五年たつて国中で五穀を補うものとなった。以後、蕃薯が凶歳の時には、儀間の人民が祭礼を行い、總管野國の恩に報いるようになった」とあります。

この記述は、野國總管の功績を直接採り上げた文書ではなく、儀間村の地頭であった儀間眞常（1557～1644）の家譜に記されたものです。そのことは、野國總管が正式な姓名をもたぬ農民でありながら中国に渡り、甘藷をもたらした人物だということが知られるようになった公的な文書であります。

この話は、18世紀に琉球王府が編纂した「琉球国由来記」（1713年）や琉球の正史「球陽」（1745年）にも記されるようになりました。「球陽」では、新たに次のような追記があります。「近世に至りて野国港の西地の洞中に石堂を創建し、野國の神骸をその中に奉安す。毎年二次之を祭祀す。亦野国、野里砂辺等三邑の人民、二、三月中吉を扨びてその墓を祭祀して以て豊年を祈る。亦小禄郡儀間人民、祭を儀間赤平に致し、以て野國の恩に奉ずるなり」という内容でした。

この記述は、野国村地頭の野国正恒が1700年に野國總管の功績を讀えて野國の墓を修造したことを記したものであります。その後、王府の公認を受けて、1751年に子孫（六世）が墓前に碑文「總管野國由来記」を建立し、顕彰しています。その内容は、「わが祖の總管野國は野国村の人である。万暦

年間、命をうけて總管となり、中国に渡った。時に蕃薯が五穀の助けとなることを知った。本国は大海の中にあつて毎年五穀が大風の被害をうけて飢饉の憂いがたえない。もしこの蕃薯を持ち帰って広く本国に植えれば五穀の補いとなり、国の宝となるのは必然である、と。そこで同三十三年乙巳（1605）、公務を終えて帰国する時、詳しく栽培の方法を学んで持ち帰った。はじめ野国村に植え、だんだん近村に及んだ。やがて諸郡に広めようとした時、麻氏の儀間眞常この事を聞いて尋ねて来て乞いを求めた。總管はすみやかに国中に広めるため（眞常に）詳しく栽培の法を教え、蕃薯を与えた。眞常のおかげで国中に広まった。ここに總管の功は明らかとなり広められた。これが本国の蕃薯の始まりである。～以下略」

この記述の前半は、「麻姓家譜」の内容と同じですが、後半部分は地元住民やその子孫がいかに野國總管の功績を顕彰するに至ったかの理由が記されています。由来記の石碑は戦争前までは墓のそばにあったが、今次の大戦で消え失せてしまいました。

野國總管の子孫たちは、彼の功績を認めて土籍を賜るようにと再三の申し出を王府に働きかけ、1765年に「嫡流の者だけに新



野國總管の墓と「總管野國由来記」石碑

家譜を下賜し、總管の由緒については口書で記録、祭祀を相続させるようにし、野國居住の子孫はそのまま取り立てずにおく」という評定が下されました。その後、子孫から、野國だけを氏と名乗を記す許可の申し出がなされ、1789年にはそれが認可され、野國總管の氏は總で、名乗は蕃初と命名され、和名は野國蕃初、唐名は總世儲と記述されるようになりました。しかしながら、人びとは、和名、唐名を用いずに昔から慣れ親しんだ野國總管と呼び慣わし、今日に至っております。

3. 甘藷の普及に貢献した儀間眞常

家譜史料等にみられるように甘藷の普及に尽力した人物として儀間眞常の名を忘れてはなりません。儀間は、伝授された苗と葛を輪にして栽培する方法で普及を図りました。

その後、1609年の薩摩の琉球侵攻後に、尚寧王が薩摩に連行された時、随行員として薩摩に渡り、1611年の帰国の際には、木綿の種を持ち帰り、栽培し、木綿織りをはじめました。帰国後は、農民への農作物の指導を行う田地奉行に任命されました。また田地奉行に就いた2、3年後に飢饉が起こり、儀間は自分で繁殖させた甘藷を食料にしたことで、飢えをしのぐことができました。この経験から彼は、甘藷の栽培、普及に一段と力を入れました。

その過程で、野國總管から教えを受けた栽培方法に独自の改良を加えました。儀間は、葛を輪にして植える方法よりも、葛を約一尺に切って、地中にさし込むだけの簡単に植え付けができる「挿芽法」を発見しました。この方法は植え付けの手間がはぶ

け、根付きも実の付きもよく、甘藷の普及に大きく貢献しました。現在の挿苗法の元祖ともいえます。このような儀間の努力が功を奏し、總管に出会ってからわずか15カ年後の1620年代には、甘藷が沖縄全域にまで広まったと伝えられています。甘藷の普及により、これまでの一般庶民の主食であったアワ、ムギ、ヒエなどの雑穀類から甘藷が主食にとって変わったのです。それから約130年後に琉球王府の三司官（国政を司どる三名の大臣の一人）・蔡温（1682～1761）が書いた「独物語」（1750）の中で「前代までの人口は7～8万人であったが、今では20万人に増えた」とあります。前代がいつ頃の時代なのか、確かめる術はありませんが、おそらく甘藷の普及により餓死者が少なくなり人口が増加したと考えられます。

野國總管が甘藷を導入し、儀間眞常が普及するという二人のコンビがうまく作用し、これまでの琉球の農業や人々の生活を変え、琉球社会そのものを変革する契機となりました。

奇しくも甘藷の取りもつ縁というか、甘藷導入の野國總管、甘藷の普及に努めた儀間眞常、名宰相・農学者の蔡温は、沖縄産業界の三大恩人として昭和12年、那覇市奥武山の「世持神社」に神格化され祀られています。

4. 新たな野國總管象を探る

これまで述べてきた野國總管の事蹟や口碑・伝承をもとに彼が体現したと思われる国際性、進取の気象、社会貢献の3つの視点から、その新たな人物像のデッサンを試みてみました。

1) 国際性を身につけた人物

野國總管が生きた時代、日本では徳川家康が1603年に江戸幕府を開き、鎖国への道を歩んでいました。一方、琉球国は中国との間で冊封体制を敷き進貢貿易を行い、日本、朝鮮、東南アジア諸国を相手に海外交流を図り、国を富ますことに意を用い、豊かな王国を築いていました。とはいえ中国行きを目指し、そこでいろんな知識や技術を吸収するには相当の困難があります。そのような時代状況下において渡華した野國總管は、積極的に時代を切り開きたいとの意欲に満ちた人物であったと思われます。すなわち、中国行きの志を抱いたという発想自体、野國總管は今でいう国際化の時代への扉を開き、国際感覚を身につけ、先導者の役割を果たした人物だったといえるかも知れません。

2) 進取の気象に富んだ人物

野國總管が、百姓の身分で進貢船の總管職に任命されたこと事態きわめて異例なことであり、特筆すべきことです。それは逆にいうと、野國總管が非常に優秀で才智に長けた若者であり、進貢船の總管職の任務を遂行するために大変な努力を積み重ねた人物だったと想像されます。その彼を突き動かした背景には、自らの生まれ育った環

境に安住することなく、常に挑戦と変革を求めるパイオニア精神の持ち主であり、自分自身の夢や目標をきちんともち、その実現に向けて努力した人物だったことが考えられます。その心いきは、まさしく「進取の気象」の発露といえます。

3) 社会貢献に尽力した人物

先述したように、中国からの甘藷の導入によって沖縄だけでなく日本全国の人々に恩恵を与えてきたことは、まさしく社会貢献のシンボリックな意味をもつものといえましょう。

中国への甘藷伝来は、1594年。その14年後に琉球に伝わったことになります。この間、琉球から中国・明への進貢船派遣は9回。一回の使節に二百人前後が参加しており、延べ約二千人余の人々が甘藷を見る機会があったはずです。ところが、甘藷を持ち帰り、沖縄で栽培をはじめたのは、野國總管だけです。

このような、甘藷導入にかけた野國總管の意気込みと行為には、彼の郷里で苦しむ農民たちを救いたいという使命感、強い意志、確固たる胆力を感じます。その意味で社会貢献度の最たる体现者といえましょう。

野國總管の遺徳である国際性、進取の気象、社会貢献は、嘉手納町教育委員会の教育目標にも謳われ、その具現化が目指されています。また、その遺徳は、今を生きるわれわれの生きる指標でもあり、嘉手納町の未来を切り開く精神的な糧ともなっています。



400年祭で新装なった野國總管宮

* Iha, Katsuo

1939年生 嘉手納町前教育長、沖縄県いもづるの会会長 著書「野國總管」(共著)